

日韓社会科予備教師の「より良い広島教科書づくり」プロジェクト

李 貞姫（光州教育大学）

コロナ19により様々な日韓交流の行事が中止された中で、このような交流の性格を持つシンポジウムの方が設けられ、感謝の気持ちを伝えたい。

この研究は、日韓の間に存在する葛藤を狭めていくための努力の一環として、相手国に対する認識のギャップを克服するための教育的方策の模索と見られる。日韓相互認識の転換のために教育の役割は何よりも重要である。その中で教師の認識が持つ影響力は言うまでもないだろう。教師教育という側面で、日韓予備教師の外部世界に対して開かれた教材観、内部世界に対する批判的な視点を形成する機会を提供しているという点で、このプロジェクトの意義が大きいと思われる。PPTだけでは十分に理解できなかった疑問点を中心に討論を進めたい。

1. 日韓両国の学生による日韓共同使用教科書開発に対する認識

3次（韓国→日本）：過去の反省に基づく歴史教科書

・地域教科書ではない歴史教科書

4次（日本→韓国）：これからを考える広島の教科書

・歴史教科書ではなく広島の教科書

「戦争に対する直接・間接的反省」については反対

韓国の学生たちは「歴史教科書、授業で広島をどのように扱うべきか」について悩む様子が見えたが、日本の学生たちは「歴史教科書ではなく広島教科書」、つまり地域教科書としてまとめている。ここで韓日共同教科書開発課題である「より良い広島教科書作り」に対する共通認識、すなわち基本的前提が違うようだが、研究者の意図は何か。

2. 真の対話のための政治的文脈理解と感情の政治

*2. 参加者が自分と他者の話をめぐる（政治的）文脈を理解するよう支援する。

3. 参加者が自分と他者の話をめぐる（政治的）文脈を理解するよう分析・批判する機会を設ける。

*「原爆被害をより詳細に、感情を込めて記述」

日韓両国間の葛藤が続き、協力が難しい理由の一つが、感情の政治が行われるためとみえる。感情は共同体内の個人を一つに結ぶ連帯感を形成し、構成員の間にアイデンティティを確立する機能をする。集団内のアイデンティティが強調されるほど、自分の集団では共有、協力、団結が強化される反面、対外的には競争と対立構図がさらに激しく現れるようになる。

特に、集団内のアイデンティティ強化は愛国心のような民族主義的感情が手段として動員され、社会的不信と不満が政権に向かわず、むしろ他者に転嫁する感情が前面に登場する政治が日常化してきた。このような感情の政治によって日韓両国の葛藤が増幅するのである。

「国家のナラティブによる国民意識の形成」という観点から教科書を眺めるとき、生徒たちが持っている相手国に対する感情は教科書やこれを媒介とした授業などを通じて形成された学習された感情と言える。真の対話のための「批判的愛国主義」と「参加者が自分と他者の話をめぐる（政治的）文脈理解」で、このような感情の政治はどのように考慮されたのか。

3. 「安全な公共権」作り

「安全な公共権」というのは論争に関して具体的にどういうことか。

日韓予備教師の教科書作りの経験が社会科教師として実践力量涵養に結びつくためには、韓国と日本という国家レベルの公共権を超えて人類普遍の価値である「人権」と構造的暴力の原因を取り除いていく「平和」の観点からアプローチすることを提案する。そのためには、自国内に存在する人権と平和を脅かすものが何か、人権感受性と批判的眼目を養った上で、自国の論理ではなく人類普遍の価値を通じて他者を見つめる眼目に拡張していく努力が必要であろう。

最後に、ポストコロナ時代の日韓両国という空間的制約を克服し、予備教師に討論・議論の場を設け、相互に深い対話による「真の対話」が行われることを望み、この研究がさらに発展し、日韓両国間の友好増進、さらに東アジア平和の構築につながることを期待する。